

## メッセージアウトライン コロサイ人への手紙 1:24 「キリストのための苦しみ」

[24]「ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです」

「ですから」とは23節の「このパウロはそれ(福音)に仕える者となったのです」を受けて語られている。イエス・キリストの福音に仕える者となったパウロは、あなたがた(コロサイ教会)のために受ける苦しみを喜びとしていると言う。

普通、苦しみを受けるということは喜びではない。楽しみでもない。かえってそれはいやなことであり、悲しく、残念で避けて通りたいことである。私たち人間はだれでもそのような性質を持っている。しかし、パウロは教会のために受ける苦しみを喜びとしているという。それはなぜか。それはその苦しみの先を見ているからである。

使徒の働き13~14章に書かれているパウロの伝道の働きを見ると、それは困難と苦しみの連続であることがわかる。第1回伝道旅行の時、小アジアのアンテオケ、イコニオム、ルステラの町々で彼は福音を宣べ伝え、多くの人々が信仰に入り、教会を形成することができたが、またそこには反対者たちの暴力や迫害もつきまとった。そのような中でなぜ彼は喜ぶことができたのか。それは彼の働きによって罪の暗やみの中にいた人々が救われ、永遠のいのちをいただき、神をほめたたえる者に変えられ、神の教会が形づくられるからである。そこにパウロの喜びがある。

パウロはピリピ人への手紙で、「…もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになる…」と言っている。→ピリピ1:21~24 それゆえ彼は生ける限り、このいのちの福音を伝える働きを続けるのである。

「私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしている」とはどういう意味か。

カトリック教会においてはパウロやペテロやヨハネ、その他あらゆる聖人が神のために行い、苦しんだことは彼ら自身のためだけではなく全教会のための功德として非常に蓄えられているという。ローマ法王はこの宝庫から慈悲によって信徒の罪の全部または一部を償うために引き出して与えることができると主張した。宗教改革者マルティン・ルターが糾弾したのは、まさにこの教理を土台にして行われた免罪符の発売であった。しかし、このような考えはパウロの意図したことではない。この24節には「苦しみ」ということばが二度出てくるが一度目の「苦しみ」はパセマシム(παθημασις)ということば、二度目の「苦しみ」はスリプセオーン(θλιψεων)でこれらのことばはイエス・キリストによる贖罪のための苦しみを表現するためには一度も使われていない。ゆえに、キリストの贖いの苦しみの一部をになうということばをパウロは決して言っていないということがわかる。

ではパウロがここで言っている「苦しみ」とは何か。使徒8~9章を見ると、かつ

てキリスト教の大迫害者であったサウロ（サウロはユダヤ名でパウロはローマ名。当時はこのような二通りの名を持つ人々が多くいた。後に彼はパウロという名を用いる）が迫害の息を弾ませダマスコの町に向かっている時に天からのまばゆい光で彼を照らす復活のキリストに出会い、地に打ち倒れてしまい、目が見えなくなり、彼が迫害していたのは聖書が教えている救い主なるキリストであったということを知るのであった。主はダマスコのアナニヤというクリスチャンにサウロの所に行つて彼の目が見えるようになるため手を置くようにと言われた。アナニヤはパウロが教会を迫害する者であることを知っており、躊躇するが、主は「行きなさい。あの人是我の名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わがしの選定の器です。彼がわがしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わがしは彼に示すつもりです」と言われた。→使徒9:15~16

この箇所からもわかるように、サウロ、後のパウロが受ける苦しみはイエス・キリストの福音を伝えるための苦しみであり、教会を建て上げ成長させるための苦しみであったのである。その意味でパウロはキリストの苦しみを負っているのであり、キリストの欠けを満たしていると言えるのである。

「キリストのからだとは教会のことです」

教会はエクレスシアということばであり、それは（この世から召し集められた者）を意味する。そしてこの教会はキリストのからだであり、キリストをかしらとするものである。パウロはこのキリストのからだである教会に仕える者となった。それはクリスチャンたちの信仰を成長させ、誤りから守り、戦い、純潔と真実さを保つための働きであり、このような働きにはさまざまな苦しみがともなうのである。しかしその苦しみはキリストご自身の苦しみにあずかることであり、それはまた特権であり名誉なのである。

私たちもパウロの心を心として、キリストのため、教会のために身をもって重荷を負い、苦しみを受け、そしてそのことを「喜びとしています」と言える者となつていきたい。